

西ベルリンと国際関係

——ドイツ人のベルリン報告——

シュテファン・ブント

現在、西ベルリンの人にとって、西ベルリンの存在は当たり前のことである。しかしこの奇妙な島は、外から見ると、どのように見えるであろうか。かつてこの市は大国にとっての戦場であった、そしてドイツ民主共和国にとっては大変な妨害となり、ドイツ連邦共和国にとっては負担となった。しかし両側のドイツ人にとっては橋のようなものだった。そして致命的であり、邪魔で面倒なものとなったが、逆に大事な役割を荷なうものでもあった。このことをみると西ベルリンの将来はどのようになっていくであろうか。確かにこの市の一番大切なことは生き残ることと、神話になったことだった。

Churchill の疑問

もし Franklin D. Roosevelt 大統領の思いのままだったら、今日のベルリンはドイツ連邦共和国とドイツ民主共和国の国境に位置していたにちがいない。またアメリカの国防大臣の思いのままだったら、占領地帯の境はすべてベルリンの中に持ち合わせていただろう。そうするとベルリンは両方のドイツの間の国境の町になったかもしれない。そしてベルリンの真ん中に国境が位置して、西ベルリンはドイツ連邦共和国の一部になっただろう。そうすればソ連は西ベルリンを西から切り離す必要がないから、ベルリンの危機は起こらなかっただろう。

またもし Churchill の思いのままだったら、問題はなかっただろう。なぜ

なら西ベルリンは形成されるはずはなかったからだ。1945年の春には彼は心配しながら赤軍の西への進行を観察していた。そして Stalin は占領した国にソ連の支配を押しつけた。また一方では Wismar から Magdeburg と Dresden を通って Torgau までの境界の西の地帯をアメリカとイギリスが支配していた。そして Churchill は西の軍隊がこの地帯をずっと持っていることを望み、ポーランドで自由な選挙をやり通したかった、そしてソ連の権力をバルカンで制限したかった。しかし Roosevelt がいなくなってから、Truman 大統領はソ連と占領地帯において結んだ条約を守らなければならないと言い張った。そのため1945年の7月には西の軍隊が占領地帯から撤退した。西が撤退した地帯をソ連の軍隊は入手した。しかし、その時アメリカとイギリスの軍隊はベルリンに入った。ベルリンにおいて戦勝国はドイツを管理したかった。そうではなければ今日の東西境は軍隊が立ち止まった地帯となったにちがいない。Leipzig と Thüringen と西 Mecklenburg はドイツ連邦共和国に属し、すべての Berlin はドイツ民主共和国の首都になるという事態になったはずだ。

それでその事から西ベルリンの問題、そしていろいろな疑問が起こった：世界的強国とヨーロッパ人とドイツ人、そしてとりわけ両方のドイツ国家に対して西ベルリンはどんな意味を持ったのだろうか、そして現在でも、この市は西のために得になるか。東に対しての損失は西に対しての利益となるだろうか。この市は将来にどんな意味をあたえることができるか。この市はないほうがよかったのではないか、などという疑問が続いている。

西ベルリンは神話として

西ベルリンは政治的な面で 200 km ぐらい西ドイツから離れている陸の孤島である。その間は空路で安全に結ばれている。また歴史的に他のものと比べものにならない壁に囲まれている。この壁は敵を防ぐためのものではなくて、敵によってこの市の魅力に対して作られたものである。また経済的にも西ベルリンの存在は常識に逆らう。予算の半分は Bonn からのものであって、そして西ベルリンはこれからも Bonn の政府補助金が必要である。西ベルリンの質

易相手は97%が西ベルリンの近くではなくて、もっと西の方にある。西ベルリンは意図的ではなくて間違いで成立したといてもいい。戦勝者は占領されたドイツをベルリンから支配しなかった。しかし終戦3年後は戦勝者が喧嘩わかれをし、そのためにベルリンの三つの占領地帯が残った。この無意味な形成物は失敗した政治を象徴している。

西ベルリンは生き残った。しかし西ベルリンはそれ以前より重要な意味を持つようになった。共産主義に抵抗する自由の模範になって、象徴となって、そして結局神話になった。そのために戦後の時代を理解しなければならない。その当時東か西が世界を支配するという考えがあった。それは、ドイツの統一が政治的な問題ではなくて、むしろ政治的に当然なことであった。これは西ベルリンの人にとって存在論的な問題でした。戦争のあと西ベルリンが島として何十年間も生き残るだろうとはだれも思わなかった。

しかし区分けがもっと深くなって、そして市の四つの部分に住んでいる人たちは二つの貨幣単位と二つの国家ができるかどうかになるだろうかとの問題をだした。Stalinはその問題を封鎖によって解決しようとした。今日それは目ざましい話となったが、私たちはその幸運な終わりしか覚えていない。1948年6月25日には何も確実ではなかった。その島のような市は西の方への道を、全てさえぎられてしまった。200万人の人口を空路の橋でしばらく補給できるかどうかだれもわからなかった。アメリカ人とイギリス人はその市をすてないように決定した。また西ベルリンの政党も西欧列強がベルリンに残るようにそして西ベルリンの人が西欧列強から離れないように努力した。大衆は自分の意志を表した。それはアメリカ人とイギリス人とフランス人をベルリンと結びつけるということだった。このことが封鎖の初めに行われていれば、めんぼくを失わなくて、撤退することができたかもしれない。しかしその時、フランス人はそうしなかったが、アメリカ人とイギリス人はちょっとだけためらっていた。封鎖は西ベルリンの誕生であった。西ベルリンに対するソ連の支配が失敗したので西ベルリンの独立が生まれた。西ベルリンは最初にアメリカがヨーロッパをすてることができないという模範になった。アメリカの援助によって

弱くなった西ヨーロッパは独立を保つことができ、そして西ドイツ人は西ヨーロッパを信頼して、西ドイツの国家を創立することができた。西ベルリンはアメリカ人がヨーロッパに残す模範だった。だからアメリカの大統領は自由を愛する市を防衛したいという証明をしなければならなかった。

特に西ベルリンはソ連に対して抵抗が可能であるという効果を見せた。事実、モスクワの権力範囲にある国（チェコスロバキアは1948年に）は一つずつ共産主義になってしまった。しかし西ベルリンでは、見せかけの止まることのない世界共産主義を止めた。じっさいに東ヨーロッパでは誤った希望が生まれた。わずかの人々だけはアメリカ人が自分の所有権を守っていることを知った。そしてベルリンは自由の灯台として東の方へ遠く光り、西の方へ逃げる人々の助けにはなった。しかし抵抗したり自由を望んだ人々の助けにはならなかった。西ベルリンはドイツ人がもう一度独裁を押し付けられることに反対するという模範であった。ベルリンでは最初に勝利者と敗者が同盟者になった。それは政治家の間ではなくて大衆の間であった。同盟者とドイツ人はお互いを頼らなければならないとわかった。ボンでは国家が創立されて、複雑な条約制度ができあがり、そして結局その国家に主権があたえられた。しかしベルリンではまだ占領法が残っている。占領国はすでに1948年に保護国に変わった：保護国という言葉はけっして婉曲語法ではない。封鎖の長い間のあとアメリカ人はベルリンの人とドイツ人を区別した：ベルリンの人は「自由の英雄」であって、ドイツ人は「Hitler の家来」であった。

1958年と1962年の間に、Stalin の後任 Nikita Chruschtschow が西欧列強をベルリンから追い出そうとした時、核戦争の危機にもかかわらず彼らはベルリンに残った。この力比べの時にもベルリンの人は西の方に止まる強い意志を表現した。そしてベルリンは一つの神話になった。

この危機が終わった時にベルリンの神話が修辭に辿り着いた。Schöneberg の市役所の前、今日の Kennedy 広場で、1963年6月26日に John F. Kennedy が演説で次のように言った。「2000年前に人は『私はローマの市民である』ということをもっとも自負していたが、今日では自由の世界において『私はベルリ

ンの人です』というならば、それはもっとも自負に満ちた発言である。」

自由大学で大統領は、西の安全ができるだけ保もたれる範囲、東との貿易関係を守らなければならないと言った。大統領は実用的な理性を励ました。ドイツ民主共和国の交渉のあと、西ベルリンの人は少なくともクリスマスの間は東ベルリンの親戚を訪問することができた。それは壁ができてから初めてのことだった。

その後2回目のベルリンの危機はもう一度、ベルリンの神話を強めて、それから次の10年の間、それは続いた。これはとても自然な過程だった。しかし融和政策によってベルリンはだんだん自分の機能を失ってしまった。大国の政治基本になると、現状は統一という記念碑の説得力がなくなる。自由の保護国では、Vietnam 戦争をした時に、多くのドイツ人にとっての一つの理想が崩れてしまった。アメリカとの友情関係が損害を受け、そして特にベルリンの学生は騒ぎ抗議した。

1971年の4か国条約は西ベルリンの存在を前よりもっとよく保証したが、この存在の意味はだんだん問題となった。西ベルリンは現在、西ベルリンでしかない。西ベルリンは上位の目標を持っていない。そのために西ベルリンの神話は禁句になった。20年間、西ベルリンは英雄的な力、ようするに民主主義者のしんぼう強い自己主張を代表した。しかし今日でも、それは必要ではないのだろうか。

大国の戦場としての西ベルリン

西ベルリンをめぐる、西欧列強とソ連の間には当然争いが起こった。たとえば、ベルリンにおいて西マルクか東マルク、どちらが有効であるかについての争いなどがその例である。ソ連は西ベルリンを圧迫して、西ヨーロッパを同時に圧迫していた。逆に西欧列強も民主共和国の強化を邪魔していた。アメリカは西ベルリンを放さないで、西ドイツの国家創立を精力的に進めた。そして、ベルリンにおける最初の戦いでは効果のある航空路によって勝つことができた。しかしソビエトの占領地帯の中心でしっかりした立場を得たことは、ベルリン

の問題を永遠にした。「ドイツ民主共和国の体の中にある異物」ということが、その時「苦勞の種」としてよく言われた。

アメリカの Dulles 国務長官は共産主義をソ連の境のうしろに戻したかった。しかし1953年6月17日、ドイツ民主共和国で労働者たちのストライキが起こった。その時に西ベルリンの Scharnowskij 労働組合長はそのストライキを応援していた。しかし、アメリカ、イギリス、フランスは逆にその組合長を批難し、ゼネストという言葉を禁止した。その結果、ストライキは赤軍によって鎮圧された。

1958年の11月に始まった第二次ベルリンの危機では西側の態度がとても明確になった。Chruschtschow は西欧列強が6週間以内にベルリンから撤収しなければならない、そして非武装化し、自由な市にかえなければならないと言った。しかし彼はそれ以上とりわけソビエトの最高支配権を認めることを望んでいた。Chruschtschow は第二次世界大戦のあとでできた権利分割を固定したかった。彼は両方のドイツの国家を国際法的に認めてもらいたかった。西ベルリンを自由な市にして、その後占領したかった。西欧列強の交通が赤軍のかわりにドイツ民主共和国の税関史によってしらべられることになろうと言って、彼は西側を脅かした。ベルリンの存在を保証するために全国のドイツについての交渉が必要になった。しかしイギリスとアメリカの政府がオーデル・ナイセ線を認め、二つのドイツの国家を認めようとしていた時に、ボン政府は激しく反抗した。そのため同盟者は三つの方からせめられた。そして、モスクワとできるだけ利害の衝突をさけたかった。それからボンで裏切り者としてみられたくなかった。そして西ベルリンの人も彼らの不満を言った。1961年6月、Chruschtschow は暴力で結論を強要したかった。彼は Kennedy 大統領に Wien で会った時に、1961年でベルリンの問題を戦争をかけても解決しようと説明した。Kennedy は挑戦を受けて立った。その時アメリカは西ベルリンを守ることを主張した。Chruschtschow は東ベルリンがソ連のものになると理解した。そして8月13日にベルリンの壁を作った。彼のベルリンについての騒がしい演説は東ドイツでパニックを起こした。そのためにたくさんの人が亡命

した。1961年の7月には優秀な人々は民主共和国から逃げた。その壁ができなければ東ドイツの経済は崩れたかもしれない。Chruschtschowはその壁を作らなければならなかった、そしてKennedyはそれを許さなければならなかった。ゆえにKennedyもChruschtschowも彼らのドイツの同盟者に反感をもたれた。たとえばUlbrichtは失望した、なぜならばドイツ民主共和国は全てのベルリンを支配できることを望んでいたからだ。西ベルリンの人は保護国の指示の無関心さに憤激し、そして自分の将来を心配した。一方Kennedyは、核戦争がさけられ、壁ができることでほっとした。「Chruschtschowはあきらめた。壁が建つと、向こう側の地帯を占領したくなくなるからだ。」8月の末にアメリカとソ連は自分の軍事力をお互いに見せた。Check-Point-Charlyという西ベルリンと東ベルリンの間の境界線の前で、両側の戦車を見せびらかした。それは大きな芝居でしかなかった。けれどもその絵を世界で見ることができた。そしてそれはその両方の大国にとってとても大きな負担となった。

そして、その壁は、Chruschtschowが社会主義における経済的、社会的、精神的優越について言ったこと、そしてもちろん、その双方の社会制度の平和的競争についての誤りを証明した。しかしその壁はアメリカが自由の優勢として約束したことが誤っていることも証明した。そしてアメリカは10年の間に鉄のカーテンを破るほど強くなりたかった。そして25年後の今日、その話題がまたでてきた時、Ronald Reaganは、彼がもしその時大統領だったら、戦車でその鉄のカーテンをこわしただろうと言った。全て終わってから英雄のふりをするのはとても簡単だが、しかしその議論において、アメリカの傷はまた、とても深くなった。そしてアメリカはその時に非常に弱くみえた。

東ドイツの国家は強化することができて、そしてWashingtonとMoskvaはその西ベルリンという島を認めた。また一方ではアメリカはCubaに対して控え目の態度を約束した。そしてソ連は西欧列強が西ベルリンから離なれることをもう求めなかった。

両方の大国は、昔のドイツの首都について争うことをあきらめた。そしてそ

のベルリンの問題を両方のドイツの国家にまかせた。しかしいろいろな問題が残った。

1963年から Moskva と Washington はベルリンに対しての希望をできるだけ許し、必要な時に制限した。同盟国は連邦議会と連邦参議院と連邦議会総会をベルリンで行うことを許した。しかしドイツ民主共和国はベルリンの交通を妨害した、そしてソ連のジェット戦闘機が会議ホールの上に雷のような音をたてた時に同盟国はそのような集まりをベルリンで禁止した。東ドイツの Ulbricht がドイツ連邦共和国の政府に憤慨した時に、ソ連はドイツ民主共和国がベルリンへの高速道路で、あまり過激でない復讐をすることを許した。1969年の時に連邦共和国の政府は大統領の選挙をベルリンで強要した、そしてやっと危機を避けることができた時に、4か国はまたベルリンについて相談した。今度は西ベルリンを戦場にしない方法を話し合った。そしてそれは成功した。というのも Willy Brandt の政権によって、1970年の8月に Moskva の条約は、ドイツ連邦共和国と東ヨーロッパの関係を整理したからだ。それは1972年の6月の4か国の条約の条件だった。戦争の勝利者は西ベルリンがこれから戦いの対象にならないように、そしてドイツ人をもう一度引き留めることを約束した。その平和は本当に続いた。というのは80年代の初め、大国がまた敵対していた時にも、そのむかしからの戦場は静かだった。

ドイツ連邦共和国とドイツ民主共和国は、独自の政治を東西の境目にかかわらず、初めた時に、彼らの同盟国はそういう独立の政治を管理することが必要だと思っていた。西ベルリンにおいて、その4か国は、政治的と法律的にいつまでもドイツの支配者である気持ちが今でも強い。現在でも西ベルリンでは、その4か国の大使が全てのドイツの責任者として集まる。ここでは彼らはもう支配せず、けれども相談してドイツを制約する。

西ベルリンはドイツ民主共和国に対しての妨害

かつてドイツ民主共和国の政治家は、西ベルリンを自分の国の中で敵の前哨としてみなした。そして今日では、異物とみなしている。1946年4月、全ての

ソビエトの占領地帯でドイツ社会民主党はドイツ社会主義統一党としてまとまった。しかしベルリンの社会民主党の急な統一に反抗した。そしてソビエトの軍事力の圧迫から、ドイツ社会民主党は共産党と合併させられた。しかし冷戦が始まった時に西ベルリンは訪問客を魅了しようと努力をした。そのため東マルクで訪問客は市電に乗ることができたし、映画と芝居と展覧会を見ることができた。また、助けをもとめる人たちのために相談所も作った。西ベルリンの放送局はドイツ民主共和国の人たちと、東ドイツについて情報を流した、そして政治家はテレビで直接に東ドイツに住んでいる同国人に話かけた。長い間、その政治家はドイツ民主共和国の人々に本当の代表に思われたのである。そのために西ベルリンは「西のショーウィンドー」または「自由の世界の前線の市」になった。

東ドイツの国家は西ベルリンに致命的におびやかされたことがなかった。それは、西欧列強が慎重すぎて、そして西ドイツ人はあまりに気が小さすぎたためだ。それにしてもドイツ民主共和国の最も難しい危機は、間接的に西ベルリンに関係がある。1953年6月16日のデモは、ドイツ民主共和国の東ベルリン以外のところで行われた。西ベルリンで何が起こったかと西ベルリンの放送局からドイツ民主共和国の人々は聞いた。そのために抗議は全国中で野火のように広がった。西ベルリンの場所はドイツ民主共和国にもっとも大きな問題を起こした。それは東ドイツの国家を12年間困らせた。ドイツ民主共和国からは、だれでもいつでも出られた、それはもう一つのドイツがあったからだ。ポーランド人やチェコ人やハンガリー人のように亡命しなくてもよかった、自分の国の西の部分に移動すればよかった。

壁ができるまで300万人がそうした。その人数の半分は25歳以下だった。1952年からほとんど2万人の工学者と技師、4千人の医者、1,500人の歯医者、775人の大学の先生と8千人の他の教師は西の方へ移った。企業が生産の見積もりができなかった。それは、次の日に何人の労働者がいるかわからないからだ。また、軍隊も軍事力を守る充分の義勇兵がいなかった。しかし壁ができてから半年後、ドイツ民主共和国は国民皆兵を義務づけた。1960年に農業は完璧に国

有化された。何万人もの農夫は協同組合に追い込まれた。そして、逃亡者の数はまた増えた、1961年の夏には、ベルリンはずっと閉鎖されるという恐怖がさらに加わった。そのためドイツ民主共和国は消耗した。

当時の東ドイツの書記長 Ulbricht は壁は作らないと宣言し、そして西ベルリンをドイツ民主共和国に組み入れたいと望んでいた、しかし、その2か月後 Ulbricht は国境をしめたが、西ベルリンの存在を認めなければならなかった。ドイツ民主共和国は壁の国家になって、逃亡者は撃ち落とされた。そして越境を失敗したものは死刑となった。それにしても、1961年の8月、壁ができたことは、東ドイツにとって1973年の国家として認知されるまで意外な成功であった。それはときどき2回目の国家創立と言われる。その時に2回目の強化が始まった。壁の建設はだんだんドイツ民主共和国の統一の希望をぶちこわした。政府は国民を支配する権力を得た。これからは誰もがドイツ民主共和国で全ての人生をすごさなければならないという覚悟をしなければならなかった。人々が持っている目的は共産主義のドイツ民主共和国の条件の範囲で実現するしかない。人々はその国家を選べなかった。それよりいい国家を想像することはできるが、もう彼らにとって、ドイツ民主共和国は現実のものだった。そしてそれはしだいに彼らの国家になった。1970年の Brandt の東西政治は Ulbricht にとって新しい危険をもたらした。なぜなら、ドイツ民主共和国の認知は4か国が西ベルリンについて一致するという条件に結びついていたからだ。ドイツ民主共和国はベルリンの通過についての主権を手放さなければならなかった。西ベルリンとドイツ連邦共和国の間の結びつきは許可された。そのほか、ドイツ民主共和国は多くの西ベルリンからの訪問客を受け入れる心構えが必要だった。Ulbricht は東ドイツの真ん中にある異物をあきらめたくなかった。しかしその時彼は、その異物の無限の生存権を認めなければならなかった。その後、はげしい抵抗によって彼は交代させられた。彼は西ベルリンによって倒された。そのあと4か国の条約が成立した。

今日のドイツ民主共和国は、地理的、法律的に半分の首都しか持っていない。東ベルリンは西欧の概念によって相変わらずソ連の占領地帯である。そういう

ことは今までなかった：自分の名前を持っていない都市。そしてその都市は「東」か「ドイツ民主共和国」という付け加えて確認することができる。この首都は今でも魅力的な兄弟の陰にある。外交官、記者、商社マンたちは買い物や、遊びに出かけたければ東ベルリンを去って西ベルリンへ行ってしまう。だから競争相手を防ぐために東ベルリンは壁を必要とする。またここは外国の兵隊に管理され、そして民主共和国の軍隊はパレードできない。パレードすればアメリカは抗議する。結局、世界の政治家たちはこの首都は民主共和国の首都であっても、この国に属していないと主張している。

確かに西ベルリンがなかったらドイツ民主共和国はもっと早く発展することができたかもしれない。東ドイツの国家の利害から見れば西ベルリンの生存は邪魔であった。

ドイツ連邦共和国に対しての負担

ドイツ連邦共和国に対しての最初の負担の印は2プフェニヒの切手であった。その切手の上には「Notopfer Berlin」(ベルリンのための義えん金)が書いてあった。封鎖は西ベルリンの経済を麻痺させた。そして西地区は個人の寄付によってこの市を援助しなければならなかった。しかし戦後の人々には義えん金という言葉がとても嫌だった。誰もがこの切手によって不愉快なおもいをした。

切り離された市が必要とするものは、ドイツ連邦共和国の予算から出て来る。それは西ベルリンの半分以上の予算に当たる。1987年には140億マルクが西ベルリンのために出された。それはドイツ民主共和国のビザ料金、航空運賃の補助金そして西欧列強からの占領軍分担金である。西ベルリンのための税法上の優遇措置は、ドイツ連邦共和国が半分、西ベルリンが3分の1、連邦の各州がその残りの分を引き受ける。もし西ベルリンがなければ、ドイツ連邦共和国はその費用を払わなくてもすむ。

また、政治的負担はもっと重い。西ドイツの政府は外交的に、いつも西ベルリンのこと配慮しなければならない。特に政治的にはドイツ連邦共和国の経済力をドイツ民主共和国に対して武器として使うことができなかった。1960年の

秋、西ドイツは東西ドイツ間貿易条件を解消をしたが、3か月後それをまた復活させられた。また第二のベルリンの危機の時に、ドイツ連邦共和国は大変な苦境に陥った。その時、アメリカは、西ドイツがベルリンへの連絡路を自由にするために、核兵器戦争をする気があるかどうかと尋ねた。しかし当時の西ドイツの首相 Adenauer の返事ははっきりせず、むしろ否定に近かった。Schröder 外務大臣は具体的解決の方法として戦争を避けるために、ベルリンを Lüneburger Heide に再建することを提案した。Chruschtschow の最後通告はすべてのドイツの政治を震えあがらせた。ソ連も同盟国も、西ベルリンを守るために、オーデル・ナイセ線を認めそしてドイツ民主共和国占領地帯ではなく一国家としてみとめることを Adenauer に迫った。それはドイツ統一をあきらめろという意味だった。しかしこれには西ドイツのどの政党も猛反対した。

Adenauer にとって西ベルリンは致命傷になった。1961年8月13日壁が建てられドイツ統一は不可能になったことがはっきりしたのち、彼は連邦議会選挙で絶対多数を失い、そのために、首相の任期2年（通常4年）に限りられてしまった。

しかし Brandt 首相の時にも西ベルリンは大きな負担であった。

彼は東ヨーロッパとの政治的平和を望んでいたので西ベルリンを東西の戦場にしたくなかった。4か国の条約によって、ボンに対する負担は軽くなった。政治家と外交官は西ベルリンの権利が守られることに気をつけなければならなかった。そのためどんな条約でもベルリンの条項が必要となった。それでたくさんの条約は困難になった。また東ヨーロッパで行われる展覧会、見本市、大会、学会などの時にはどのようにベルリンの人が参加できるか、という議論がはじまる：組織としてか個人としてか、自分の場所を持っているか西ドイツの場にいっしょにいるか、ベルリンの旗かドイツ連邦共和国の旗で参加するかなどという面でも、西ベルリンは大きな負担であった。

そのほかにも首都の問題がある。もしベルリンの特殊な立場がなかったら、ドイツ民主共和国の政治は西ドイツの政党に対してもっとスムーズな外交ができたかもしれない。たとえば1970年に Brandt は Stoph に Erfurt で、そし

て1981年に Schmidt は Honecker に Schorfheide で会うことは必要ではなかっただろう。また、1987年、西ベルリンの Diepken 市長はベルリンの750年記念のために東ベルリンに行けるかどうか心配をする必要はなかっただろう。しかし条約の中心である交通の通過規制は西ベルリンの人々にとって意外にうまくいっている。西ベルリンは保護と補助とを必要とする島である。そして西欧列強は西ベルリンの保護、ドイツ連邦共和国は西ベルリンの補助の役目がある。ゆえに、西ドイツの政府は西ベルリンの人々の生活力を維持する役割を持っている。

このようなことから Brandt 以降のドイツ連邦政府はドイツ民主共和国に対して、できるだけ親密な関係を保持しなければならないとわかって来た。そうすれば、政治的な不安の時に西ベルリンが守られる。ヨーロッパに平和があることは同盟国にとってより西ドイツにとって大事な事である。

しかし内政の面でも西ベルリンの西ドイツ人にとってときどき負担になる。保守的な人々にとってこの市はちょっと不気味である。難民などの人たちはここに入って来て、西ドイツの兵役忌避者は西ベルリンへ逃げる。そのため、社会的な問題と政治的な抗議は急に現われる。つまり学生運動と家の占領と二者択一の生活。残念なことに閉鎖された公共組織では普段より政治的な近親相姦がある。欲張りやスキャンダルと政党の中の派閥の内紛はベルリンのみじめさをもっと大きくした。そこで西ドイツの政府は大変苦勞した。政党はベルリンのためにいろいろな人事的な犠牲をした。Klaus Schütz と Hans-Jochen Vogel と Hans Apel はボンからベルリンへ行かなければならなかった、なぜなら社会民主党の市長候補者がいなかったからである。同じ理由で Richard von Weizäcker はキリスト教民主党のためにその義務をはたした。1980年代には多数の市参事会もドイツ連邦共和国から来たのである。投票で落選した人かボンで必要とされた人はまたベルリンから去ってしまった。Hans Apel の発言によるとたくさんの政治家は政党の兵隊として西ベルリンに派遣されて来た。ボンと西ベルリンの関係は決して簡単ではなかった。もう60年代にはベルリンの疲れ (Berlin-Müdigkeit) という言葉が出てきた。

最初、ベルリンは将来のための投資に見えたが、Spree川（ベルリンのこと）では得ることは何もなく、そして現状しか守ることができない、ということがだんだんわかってきた。

市参事会はベルリンがいつも受けているばかりではなくて西ドイツか東ドイツに何かをあたえなければならぬと1980年代に主張した。その気持ちは確かに正しいけれどもベルリンは何かできるだろうか。補助金を交付された人は補助金に慣れてくる。補助金の精神は受け取らなければならないが、受け取り側は何もやってあげることができない。そうなってくるとほどこし物ももらうことは、自尊心を傷つけることになるのでそれを自分たちの権利として主張するようになった。そして結局、西ドイツの負担は義務として見られるようになった。しかしやっぱりそれはいつまでも負担である。西ベルリンがなかったらドイツ連邦共和国は根業法則の（Grundgesetz）臨時措置にならないで、もっと早く現代的な民主主義の西ドイツの国家になったかもしれない。

橋としての西ベルリン

1946年にある西ベルリンの記者は日記に次のように書いた「私たちは橋でありたい、しかし結局私たちは橋頭の運命である。」ベルリンを守るか、ベルリンからドイツを管理するすべての希望と計画は失敗で終わってしまった。ドイツの中央管理はフランスによって妨げられた。西ベルリンをドイツ連邦共和国の首都にする試みは失敗した。Adenauerは1946年のドイツの統一のあとに、ベルリンは新しいドイツの首都になれないことを説明した。それは反プロイセンへの敵意ではなくて、ドイツは西の方へ移動されることを意味した。ドイツは統一されていても、その中心はポーランドの国境から80kmしかはなれていない、西か南に位置している。むかし、ベルリンは中部ヨーロッパの最大の交通の要地であった。しかし今では終着駅であり、ParisからWarszawaを通してMoskvaまでの特急列車しか通らない。また、むかしはドイツの一番大きい産業都市であったが、60年代から西ベルリンは経済的に生き残るために戦った。西ベルリンの工業生産はむかしとくらべると75%に下がった。その上、西

ベルリンはすべて東の中で閉鎖されている。1936年当時、ベルリンは35%の品物を今日のドイツ民主共和国に引き渡していた、1986年、西ベルリンからは、1%しか引き渡せなくなった。

それにもかかわらず、西ベルリンは壁ができるまでの時代ドイツ民主共和国の人々に幸運を持たらした。なぜならたくさんの人にとっては避難用の橋だったからである。政治的危険におちた人、職業を禁止された人、共産主義のために子供の教育が充分できない人にとって、この橋は救いになった。

そしてまた、これは家族のための橋でもあった。両親、兄弟、親戚、友人など、どちらのドイツでも会うことが出来なかった人々は、西ベルリンで会うことができた。

また、経済的な橋でもあった。東ベルリンの人は東ドイツではない物を必要とした時に西ベルリンで買うことができた。しかしそれはひどく高かった。1西ドイツマルクはだいたい4東ドイツマルクに相当する。しかしいろいろ日常的な物から一番新しい流行の物まで西ベルリンでそれは手に入った。

そして、精神的な橋として、芸術、科学などの専門的分野を維持したかった人は西ベルリンへ行った。

また、日常生活の橋として。東に住んでいる人が、西ベルリンで働いたり勉強していた場合、その国境を毎日越えた。1961年の8月まで3分の1の学生は東ベルリンやドイツ民主共和国の出身だった。5%の労働者は向こうから来た。

壁ができてから小さい橋がまた残った、そしてこれはだんだんまた広がって来る。西ベルリンの経由でまたいろいろなことが可能である。ドイツ連邦共和国の人はいつまでも『一日滞在』のために東ベルリンへ行くことができる。たくさん西ベルリンの人はドイツ連邦共和国のパスポートを申し込んでいる。なぜなら、それがなければ西ベルリンの市民は東ベルリンに行くことができないからである。それで60年代に東ベルリンは親戚と友人の集合になった。1980年に金の強制交換は倍になった。その時から、東ベルリンを訪問する西ベルリン人、西ドイツ人の数は減ってしまった。

現在、多くの東ベルリンの人は西ドイツの金を持っている、そしてFriedrich-

Strasse の駅で年金生活者の人々は家族のために西ベルリンで買い物をするためにならんでいる。西ベルリンの若い女性は東ベルリンの美容院に行く。それは強制交換にかかわらず西ベルリンより安い。西ベルリンのホテルが満員の時、たくさんの客は東ベルリンのホテルの泊まる。西ドイツのマルクで払えば、東ベルリンのホテルのサービスはとて素晴らしい。つまりそのホテルの位置は便利で、旅券検査はとて早い。壁の25周年の記念日に両方のベルリンのプロテスタントのビショップは公開状の中でお互いの意見を交換した。作家、芸術家、学者はお互いの壁を越えてのつながりを編みはじめた。

東ベルリンからの亡命者は好んで西ベルリンに残った。東に住んでいる親戚と友人への道は近い。西ベルリンではおなじ市電と地下鉄が走っているが、それらは技術的にもっとすぐれて、もっときれいだ。

今日の西ベルリンはむかしのような技術的な意味をまた持っている。もし西ベルリンの送信機がなければ3分の1のドイツ民主共和国の人々は西ドイツのテレビを見ることができない。たとえば、Dresden の近くでよい職はあっても、西ドイツの放送が入ってこないという理由で転勤を断る東ドイツ人も少なくない。

西ベルリンは政治的な意味も持っている。ドイツ連邦共和国は東ドイツがなくてもすむが、ドイツ民主共和国はそうではない。つまり西ドイツ人は東ドイツのことをあまり考えていないが、東ドイツ人は西ドイツを忘れることができない。西ベルリンは、ドイツとヨーロッパがエルベ川で終わらないことをいつまで思い出させる。前の西ベルリンの市長 Eberhard Diepgen は、次のように書いた「西ベルリンは一つの中心である。だから、ポンの政治は心せまいライオン同盟の考え方に圧倒されないように配慮しなければならない。」

1963年、Willy Brandt 市長は、西ベルリンの人がすくなくともクリスマスと正月に東ベルリンの親戚を訪問することができるという通行証条件をドイツ民主共和国の政府と結んだ。多くの人はこの政治に反対した。なぜなら20年間、包囲された市の中に、保守的な、将来を心配するようとりでの考え方があるからだ。西ベルリンの人のための利益は Brandt の対東政策 (Brandts

Ostpolitik) の時一番大きかった、しかし彼らを一番納得させにくかった。西ベルリンの存在はドイツ連邦共和国が東ドイツの面倒をみる動機と可能性を発生させる。西ドイツ人はビザ料金を払わず新しくなったアウトバーンで西ベルリンへ行って、そして安い運賃で Tegel 空港へ飛ぶ。ドイツ連邦共和国は、西ベルリンへの鉄道交通をもっとよくするための費用を負担する。西ベルリンはボンと東ベルリンの対話を続けることを可能にする。東ベルリンはドイツ連邦共和国に近づいて来た。

もちろんいろいろな恥ずかしいことがある。たとえば、ボンは、ほとんど西ドイツ人しか走らない高速道路のために費用を負担する。もし西ベルリンまで Intercity の鉄道交通があれば、西ドイツ人はもっと早く、もっと便利にドイツ民主共和国を通ることができる。そして東ドイツの人はここでも差別されてしまう。また西ベルリンのためだけという動機でボンの政府は、東ドイツの公害に苦しむ西ベルリンの空気をきれいにするのを手伝っている。

もし、西ベルリンがなければ、両側のドイツ人はお互いのことをあまりよく知らない。そして会う回数はずっと少なくなっていただろう。しかし、今日、西ベルリンの存在は東ドイツに西への興味を持たせて、そして東を刺激するものとなっている。その結果、西ドイツと東ドイツは政治的に離れることができず、西ベルリンは橋のようなものとなっている。

使命としての西ベルリン

80年代の半ば西ベルリンはドイツ連邦共和国の60年代の政治的立場にたどりついた：西側への関係はよくきちんとしているが、東への関係はまたほとんど不明である。1971年の4か国の条約のあと、西ベルリンに対するいろいろな期待が生まれた：西ベルリンは第11番目の連邦州、同時にドイツ民主共和国と対話する市、または西へのショーウィンドーそして東につながる橋である。それは政治的に不可能なことだとその時は、だれにもわからなかった。そして西ベルリンがどんな立場にあるか80年代になってもはっきりしていない：西ドイツの市それともドイツの市、西ヨーロッパの前哨また東西ヨーロッパのつなぎめ。

ポンの政府は、東ベルリンをドイツ民主共和国に合併するかわりにポンの役所を西ベルリンへ移動することを企てている。しかしそれはいつも失敗で終わる。西ドイツとソ連の間に問題がおこり、そして西欧列強が介入してくる、なぜなら、西欧列強はソ連と面倒な事をさげたいから。そしてそのためにドイツの目的を抑圧する。

西ベルリンとドイツ連邦共和国の関係は経済的、交通的、日常的な面で発展しなければならないが、法律的と政治的での変化はなかなかむずかしい。しかし西欧列強の保護を信頼すると、ベルリンの現状はとりわけ国際法的である、つまりそれはこの市に対しての4か国の支配権である。東ベルリンはドイツ民主共和国の首都であり、西ベルリンはドイツ連邦共和国に属しないが、事実上、一つの連邦国と同じように根本的な権利と義務を持っている。

西ベルリンの法的な立場を変えたい、発展させたい、ダイナミックにしたい政治家は4か国をおこらせる。1987年、西欧列強は、もし西ベルリンがドイツ民主共和国に近づけば、そのときめは、我々が決定することだ、という態度で Eberhard Diepgen 市長にせまった。その時に Diepgen は750年記念祭のために東ベルリンへ行きたかった。また Erich Honecker も、開会式のために西ベルリンを訪問したかった時に、同じ体験をした。

それに対して西欧列強は東ベルリンに大使館を作り、大使は東ベルリンで正式の訪問をする。同盟国は東ベルリンにおいて占領国であり、そして、同時に占領した国家の中でそれらの大使は信任された。同盟国は同じところで支配者と客である。このことは法律学者たちにとっていろいろなテーマを投げかけている。

両ドイツ人の中の恨みはまだ残っている。東ベルリンの政府にとって、西ベルリンの経済はあいかわらず競争相手である。もし両方のベルリンが協力すれば、この市の生活力は強くなるだろう。しかしまだ、東ドイツのドイツ社会主義統一党の一部の人々はそのような状態を望んでいない。

西ベルリンの緊張はだんだん緩和されている。ベルリンの750年記念祭はもちろん一緒ではなかったが、対立もしなかった。しかし西ベルリンの評議員会

もドイツ民主共和国もこの記念祭でもっといい関係を作ろうとした。事実、Honecker を西ベルリンに、Diepken を東ベルリンに招待しようとする試みは両ドイツ人の関係にとっては大切なことだった。しかし結局、このことは4か国の力によって失敗に終わってしまった。

西ベルリンと東ベルリンはだんだん「二重都市」になるだろう。ドイツ連邦共和国とドイツ民主共和国がお互いに同権の国家として認められれば、割合にふつうの関係がうまれるだろう。1987年にそれがはじまった、しかしふつうの付き合いまではなかなか遠い。それにしても両側は今のところそういう方向に向かっている。Brandt の西ドイツ政治は、他の列強より早く、東ドイツを一国家として認めた。「二重都市」の重みがだんだん東に移ってきたので、ちょうど良い時期になされた政治だったといえよう。

東ベルリンの意味がふえるが、西ベルリンの意味が衰える傾向になるだろう。東ベルリンはヒンターランドを持っているが、西ベルリンは持っていない。東ベルリンはドイツ民主共和国の中心であるが、西ベルリンはドイツ民主共和国の前哨にすぎない。このような両ベルリンのおかれた状況の違いを考えてみると将来においてベルリンはヨーロッパの中にある中くらいの産業国の首都、そしてそのとなりにあるおもしろくて、しかし無駄に見える形成物となって人々に思い出される時期が来るだろう。

ドイツ連邦共和国にも、この傾向が始まった。Eberhard Diepgen は、西ドイツの政治が西ベルリンを無視しながら直接にドイツ民主共和国と接触をすることを一番心配している。ドイツ連邦共和国とドイツ民主共和国の関係がふつうになるほど西ベルリンの意味が小さくなる。ドイツ分割は継続するだろう、そしてその状態で西ベルリンは、どんな将来があるだろうか。この都市は、東西ヨーロッパの統一に協力しなければならない。70年代の初め頃より、ベルリンは Geneve か Wien か Helsinki か Stockholm のように国際会議場所にしたらどうかという話があったが、ボンは積極的ではなかった。そういう計画があれば、東ベルリンは参加するべきである。そうしないとそれは成功しないだろう。独走するのにどちらのベルリンも弱すぎる、しかし、お互いの政治

的發展を邪魔する力も充分ある。東ベルリンは首都になれない、そして西ベルリンは国際センターになれないという結果になった。

両側のドイツの間に調和が見えてくると、4か国が神経質になる。彼らはヨーロッパが現状のままでいてほしいと望んでいるからだ。もしベルリンがヨーロッパ的な機能を持ったならばそれはドイツ人の解放を励ます。だから4か国はそのことに反対する。4か国の現存はとくにドイツの抑制のためにある。

ベルリンの政治の一番大切な目的は疑い深い同盟国に信頼感を与えることである。もしドイツ分割が保証され、ドイツ人はヨーロッパの優勢な地位を得ようとしなければ、大国はベルリンから去ってしまうかもしれない。ドイツ人はこれまでの歴史の結果、二つの国家に住まなければならない。そして、これを受け入れなければならない。しかしその二つのドイツ国家は平和の關係を持って一緒に存在することを望んでいる。だから、今だに、ドイツの分割の現存を4か国は主張するが、両ドイツの間の政治的、人間的關係を干渉するべきではない。

また一方、西ベルリンの人は、彼らが東に位置している都市に住んでいても、西に所属している意識をもっている。今日も西ベルリンの人はザクセン人とブランデンブルク人とメクレンブルク人と同じように「ドイツ連邦共和国」と言わないで「西ドイツ」と言う。なぜならば、彼らはドイツ連邦共和国に対して今だに「西のドイツ」という親しみを持っているから、こう呼んでいる。

西ベルリンの人にとって西ベルリンの存在を守るのは自分の特徴を守ることである、それはうらやましようにドイツ連邦共和国をじっと見つめることではない。西ベルリン人がドイツ連邦共和国のようになめたようにきれいで完璧になりたい病的欲望を持ったなら西ベルリンはふつうの西ドイツの都市のようにつまらなくなる。故 Ernst Reuter 市長はすでに1952年に次のような疑問をなげかけた。「ドイツ連邦共和国は人工的、熱病的な雰囲気がある、しかしその雰囲気は目的がない。でもそれぞれの民族は経済的以外の他の目的を必要とするのではないのか？」

最後に今日の西ベルリンは半分の都市として残っている。そしてその存在権

は確か保証されている。しかし単なるドイツの清潔な平均的都市であるよりもこの今までの歴史的背景にある特殊な状況を生かして、インパクトのあるドイツの将来に光りを与える魅力的な都市として発展していく可能性は充分にある。

参考文献

- Hartwich, Horn, Grosser, Scheffler. Politik im 20. Jahrhundert, Braunschweig 1977
- Besson, Waldemar. Von Roosevelt bis Kennedy. Grundzüge amerikanischer Außenpolitik, Fischer Bücherei. Frankfurt a. M. 1964
- hrsg. v. Werner Weidenfeld. Nachdenken über Deutschland, 1985 bei Verlag Wissenschaft und Politik, Köln
- Rathenow, Lutz. Hauswald, Harald. Ostberlin, Piper München Zürich 1987
- Bender, Peter. Wenn es West-Berlin nicht gäbe, Siedler Berlin 1987

追記

本稿は1989年1月12日千葉大学において「国際文化論」として口頭発表したものを加筆訂正したものである。